

日本新聞製作技術懇話会
広報委員会編集

編集人 辻 裕史
東京都千代田区内幸町
日本プレスセンタービル
8階 (〒100-0011)
電話 (03) 3503-3829
FAX (03) 3503-3828
<http://www.conpt.jp>

CONPT

CONFERENCE FOR NEWSPAPER
PRODUCTION TECHNIQUE JAPAN

VOL.35 No.2
2011.3.1
(通巻 206号)

日本新聞製作技術懇話会
会報 (隔月刊)
(禁転載)



JANPS2012に向けて

日本新聞製作技術懇話会企画委員会 委員長 矢森 仁

新聞製作技術展JANPSの歴史は長く、1972年(昭和47年)より開始され、前回の2009年で20回を数えます。第1回から1985年の第8回までは北の丸の科学技術館で開催され、その間出展社数は28社から42社に約倍増。入場者数も1万～1万3千人規模で推移しました。1972年は日中国交正常化の年に当たり、田中角栄、周恩来両首相が国交を結ぶ事で署名致しましたが、この影響を受けて、1974年にはJANPSとして初めて海外である中国に出展。天津市工業展示会で日本の新聞印刷機材を出

展し、2週間の開催期間中で6万人という入場者を集客した歴史も有ります。その後、第九回より晴海の国際貿易センター、幕張メッセと開催会場を移し、第13回から現在の東京ビッグサイトに展示会場を構えて開催して参りました。その間に入場者数もピーク時は2万人を超えた時期も有りました。この様にJANPSは40年近く新聞発行に関わる技術を発信し、新聞製作の上流から下流まで、新聞技術を進化・発展させ、また新しい技術の芽を新聞界に提案して来ました。

目次

JANPS2012に向けて	日本新聞製作技術懇話会企画委員会 委員長	矢森 仁	2
PAGE2011 視察記	(有)メディアテクノス (日本印刷技術協会客員研究員)	井上 秋男	4
楽事万歳	愛媛新聞社 技術局長	両門 義幸	8
	ボッシュ・レックスロス(株) サーボシステム事業部 サーボシステム事業部長	江井 智之	9
会員社リポート	田中電気(株)、東京インキ(株)		10
	東洋電機(株)、日本システム技術(株)		11
第29回新聞製作人新年合同名刺交換会開く			12
CONPT日誌他			12

●表紙写真提供：CONPT TOUR2010 入選作より

共同通信社 黒澤 勇氏「歴史を感じる瞬間(ハンブルク)」

●表紙製版：(株)デイリースポーツプレスセンター

●組版・印刷：(株)デイリースポーツプレスセンター

現代の新聞発行形態は約百数十年の永きに亘りますが、戦後の盛隆と共に様々な技術革新が有りました。新聞の多頁化、カラー化、高印刷品質化という大きな流れの中で、新聞製作技術も1970年代後半に入り、「キーレス」「CTS化」「デジタル送信」「4Hiタワー機」と各種新技術が取り込まれ、1980年代になると、オフセット化が過半数を超えて、凸輪の時代が終焉。技術的にも「CTP」「シャフトレス」「FMスクリーン」「4×1」と時代と共に新規技術が加速され、読者や広告クライアントの高まるニーズに応えるべく、JANPS出展を「核」として、新聞製作の技術開発が図られて来ました。

〈新聞協会と検討会作り協議中〉

さて、2012年11月開催まで、あと20ヶ月余りとなりました。次回JANPS開催のお膳立てを担当する懇話会企画委員会を代表しまして、次回への構想、準備状況等を述べさせて戴きます。

近年のJANPSは市場環境の激変により変貌を迫られて来ています。新聞界の苦戦がそのまま製作設備・機材メーカーやベンダーに反映し、この業界も厳しい局面に立たされているのは、等しく実感しているところです。新聞を読まない若者層の増大、デフレによる広告出稿の落ち込み、更には電子メディアの台頭。永きに亘りメディア媒体として国民に対する信用度、浸透度共に主流であった新聞は、その確固たるポジションを脅かされつつあり、JANPSもまた変貌を遂げなければならないのは避けられない事実です。懇話会では次回JANPSを何としてでも成功させねばと、通例2年置きで開催を、あえて3年先に設定し、早くから準備を進めております。新聞協会とは、昨年9月から情報技術部会、印刷部会のメンバーと共に企画委員会が中心となって「JANPS検討会」を設けました。全国の新聞社アンケートを通じ様々な意見、要望

が出され、その吟味に当たっているところです。JANPSの成功に繋がるアイデアが有れば、飛びついて実行する意気込みで進めています。今のところ、中国、インド、台湾、韓国などアジアの新聞界、業界を惹きつけられれば、と英文ホームページの開設などを考えています。また、日本の大学新聞や印刷関係の研究室にも声をかける計画も有ります。先般は世界4大展示会であるIGASの代表幹事を招いての聞き取りを実施しました。横浜の新聞博物館とは、何かコラボレーションが出来ないかと、一般集客や小中学生向け各種イベントの話も聞かせて頂きました。5月の定時総会時には、JANPS準備年と銘打って、会員各社の気運を高めるため、懇親会の場を借りて、氣勢を上げたいと画策しています。

〈プラスαの変貌を加味しよう〉

新しいフオローの風も吹いて来ました。NIEによる教育、学校での新聞取り込み、また、それにより小学生新聞が3割に達する伸び率とも聞きます。色々な局面において、新聞及び新聞に関わる技術の大きなターニングポイントに差し掛かっていると言っても過言では無いと思います。この様な背景の下、JANPS2012は激変する状況に対処するため、旧来どおりの展示会では無く、新しい時代に則したプラスαの変貌を“加味”しようと、懇話会側でもアンケートを実施し、ニーズを先行して把握する予定です。

もちろん、一足飛びで「大変貌」とは参りませんが、出展者や出展内容の裾野を従来より広げ、より幅広く、そして中身も時代に則した適応性をもって見て頂けるような展示会にしたいと思っています。繰り返しになりますが、次回JANPSに関し、皆様方の忌憚の無いご意見と、積極的な出展へのご参加を切に願っております。全員参加の気持ちでJANPS2012を盛り上げ、この新聞製作技術界をより活性化して行きましょう。

PAGE2011視察記

有限会社メディアテクノス（日本印刷技術協会客員研究員） 井上 秋男

はじめに

社団法人日本印刷技術協会(JAGAT)主催の総合印刷メディア展PAGE2011は、「情報デザイン新時代」をメインテーマに、2月2日から4日までの3日間、東京・池袋のサンシャイン・コンベンションセンターTOKYOで開催された。印刷不況の続く中、新製品・新技術の出展と充実した基調講演・カンファレンス・セミナーにより、来場者73,720名、出展社数136社、550小間、カンファレンス21セッション、セミナー14セッションの規模により開催され、いずれも昨年を上回り好成果となった。本稿では紙幅の関係で、注目を集めた基調講演と出展状況をメインにレポートしたい。



昨年を上回る来場者でにぎわう会場

■全体トレンド&トピックス

第24回目を迎えたPAGE2011は「電子書籍、デジタル印刷、次世代編集制作、環境対応」などが全体トレンドとして注目を集めた。昨年元年を迎えた電子書籍は、マルチデバイス向け編集制作ソフトはじめ電子書籍サービスやストア構築などの最新ソリューションが一堂に紹介された。特にアドビシステムズから初出展された電子出版ソリューション「Adobe Digital Publishing Suite」はホスト型サービスおよびターンキーセットとして話題となった。デジタル印刷は、印刷多様化、多

品種小ロット、バリエーション化の流れを受けて各社から新製品の出展が相次ぎ、中でも日本ビューレット・パッカード(日本HP)は、PAGE最大ブースに二つの最新デジタル印刷機を実演し、高速、高品質、コスト削減を披露した。デジタル印刷や電子出版に対応する次世代編集制作ソリューションも新潮流となり、業界大手のビジュアルプロセッシングジャパン(VPJ)は、DAM(デジタルアセットマネジメント)を中核にした「クロスメディア・プロダクション向けITソリューション」をユーザー事例とともに紹介し、立ち見が出るほど盛況となった。環境は、印刷業界における経営課題の一つとなっているが、富士フイルムグラフィックシステムズ(FFGS)は、「環境対応CTPの究極形」として新製品の完全無処理CTPプレートXZ-Rを出展し高い評価となった。

■基調講演

「元年から普及」に向けて大きく動き出した電子書籍は、基調講演・カンファレンス・セミナーでも取り上げられ、どの会場も満員盛況となった。基調講演初日の「徹底検証 電子書籍で編集・制作がこう変わる～アジア的規模で電子書籍を考える」では、各講師から「従来と同じ紙ありきでは電子書籍ではない」「紙の制作工程となっているPDFワークフローでは紙以下の価値しか生まれない。電子書籍はXMLワークフローにより、コンテンツをプレーンな状態でコンテンツ・マネジメントシステムにより一元管理して、各媒体向けのアウトプットが重要」「印刷会社は積極的に電子書籍に参加して欲しい」などのコメントがあった。2日目は「激論 電子書籍の抵抗勢力VS推進勢力」と題し、推進派として「電

子出版の構図」を刊行した植村八潮氏(東京電機大学出版局長)、抵抗派として「我、電子書籍の抵抗勢力たらんと欲す」を刊行した中西秀彦氏(中西印刷専務)が登壇し対論した。植村氏は「ケイタイ、スマートフォンなどに見られるように新たなメディアが新たな市場を創る。電子書籍が書籍を上回る時代は来る。ディスプレイに文字をのせる技術はそれほど難しい技術ではなく、電子書籍は印刷業界と違うプレーヤーが進出する可能性もある。印刷業界は変わることは難しいが、変わらなければならない」と述べた。一方、中西氏は「電子書籍制作では印刷業は救えず、売り上げも減少するので抵抗勢力となって電子書籍の足を引っ張る。業界団体を圧力団体にして書籍文化を守ることをPRする。しかし、時代は確実に変わるので、当面は徹底抗戦し、その間に次の展開を考える。電子書籍と紙の本のシナジー効果をベースに電子書籍の進化に印刷業として徹底的に介入する。そして技術集団かつアイデア集団として印刷業を発展させる」と述べた。また、カンファレンスでは「電子書籍の未来、EPUBフォーマットの活用」、セミナーでは「よく分かる！ 電子書籍の制作知識」、「印刷会社が取り組む電子書籍ビジネス」をテーマに開催され、参加者から有意義との感想が多く聞かれた。

■展示会

①電子書籍ソリューション本格化

昨年末からのスマートフォン、タブレット端末の販売増加、EPUBなど電子書籍フォーマットの標準化進展、出版社・ネットワーク会社による電子書籍サービスの本格展開を受け、各社から最新の電子書籍ソリューションが一斉に紹介されハイライトとなった。アドビシステムズは「Adobe Digital Publishing Suite」を初出展し、コンテンツの創作、制作、配信、課金、分析・最適化などを一貫して行うホスト型サービスを紹介し、わが国では今年第2四半期にサービス開始を発表した。モ

リサワは、朝日新聞出版、NHK出版、学研、集英社、小学館、徳間書店、日経BP、文藝春秋など大手出版社で多数の実績を持つ「MC Book」最新版により、印刷用に作成された書籍DTPデータからiPad/iPhone、Android端末向けの電子書籍制作ソリューションを披露した。スターティアラボは、1月はじめに発表したAndroid端末対応「ActiBook」を出展し、PDFや画像データから電子ブックやWebカタログを作成や音声ファイルやFlashコンテンツなどのリンクを実演した。このほか、ActiBookで作成した電子カタログを管理・運営するクラウドサービス「ActiBookManager2」も紹介した。なお、ActiBookは印刷・出版業界を中心に905社以上の実績がある。コトブキ企画は、官公庁、教育機関、中小企業など約700社が導入しているデジタルブック作成ソフト「My PAGE View」の最新版を出展し、容易な電子書籍制作とPCの他、スマートフォン、タブレット端末で閲覧可能やサービス形態として「ASPプラン、システム購入、制作依頼」を紹介した。コベックは、デジタルブック作成ソフト「Wisebook2」を出展し、PDF・JPEGファイルから高品質の電子カタログ作成を紹介。また、iPhone/iPad対応やアプリ内の課金、検索、配信制御を行う「BookShelf Server」を参考出品した。その他、方正、VPJも電子書籍ソリューションを出展した。(後述)



電子書籍ソリューション活発化

②デジタル印刷花盛り

主要ベンダーからの新製品の実演と多彩な

印刷サンプル展示により各ブースとも視察者が多数訪れ賑わった。日本HPは、日本市場向けエントリー機HP Indigo3550とPAGE2011にて発表したシリーズ最上位機HP Indigo7500デジタル印刷機を実演。コストパフォーマンス向上と高品質及び用紙やアプリケーションソフトベンダーとの連携も紹介し、内定含め商談も活発化した。また、新聞印刷も可能なロール紙タイプ機HP T300 Color Inkjet WebPressをデモ映像と印刷サンプル、プリントヘッドを展示し、アジア含め世界で22台の導入実績も披露した。コダックは、バリエブルプリンティングソリューションとして、太陽機械製作所製搬送機にProsperS10インクジェット印刷機(分速300m、解像度600dpi、印字幅10.6cm)を搭載して、あらかじめオフセット印刷機で印刷されたB4サイズのチラシに店舗ごとの地図や店舗情報のバリエブル印刷を実演した。大日本スクリーン製造は、フルカラーバリエブルインクジェットプリンティングシステムTruepress Jet520ZZ/EX及び枚葉インクジェットプリンティングシステムTruepressSXやワイドフォーマットUV機のパネル展示と新聞、商業印刷、出版、ダイレクトメール、サイン&ディスプレイの印刷サンプルを展示した。FFGSは、DIGITAL PRESS SolutionとしてインクジェットデジタルプレスJet Press 720のデモ映像とプリントヘッドを出展。また、低定着温度と高光沢再現性を両立させた「EA-ECOトナー」で統一された富士ゼロックス製の新製品DocuColor 1450 GAははじめ2機種を実演し多数の来場があった。キヤノンマーケティングジャパンは、商業印刷から企業内印刷までのニーズに対応するデジタルプレスimagePRESS C7010VPを出展し「新しい印刷、変わる印刷」を紹介した。また、完全子会社したOCEも初出展し、プロダクション製品のパネル、サンプルを展示。コニカミノルタ、リコージャパン、モリサワ、デ

ュプロ、日本アグファも最新のデジタル印刷機を出展した。



デジタル印刷機の実演も盛況

③次世代編集制作ソリューション進展

電子書籍、デジタル印刷、SNSなどの進展によりメディア編集制作環境は大きく変化している。このため、従来のDTPワークフローから脱却して、コンテンツマネジメントシステム(CMS)やデジタルアセットマネジメント(DAM)を中核とした次世代編集制作ソリューションの出展が増加した。VPJはコンテンツ制作の生産性、効果的なメディア配信を目的に、PAGE2011では「カタログ・チラシ製作」「出版物の編集制作」「メディア配信」「フォトプリントビジネス」向けのITソリューションを導入事例とともに紹介した。出版物の編集制作では、WoodWing Enterpriseを活用してオンライン入稿・校正、写真・コンテンツ管理、オンライン編集コラボレーション、電子出版の各業務を実演し、わが国では毎日新聞社と光村図書印刷で稼働中と紹介。方正は高度製版機能を強化したIllustratorプラグインソフト「Pack#」のほか、RIP、中国語フォント、電子書籍リーダーなど幅広いソリューションを披露した。次世代編集制作の取り組み事例として、One Stop ePublishing Solution をメインテーマに電子新聞・電子書籍プラットフォーム「NewsMediaStand」を出展。入力、管理、編集、配信、課金、管理までのトータルソリューションと、最新事例として中日新聞社のiPad向け馬柱配信サービスを紹介した。



次世代編集制作ソリューション実演

④環境対応型CTP,ワークフロー、ブルーフ

印刷業界の環境対応として各社から新製品、新ソリューションが展示され取り組み進展が伺えた。FFGSは「ADVANCED ECO PRESS Solution」として、環境対応完全無処理新サーマルCTPプレートXZ-Rと推奨湿し水XZ-A（両製品とも仮称、近日発売）を出展し、自現機、洗浄機不要によるCO2削減と省スペースを紹介した。500台の実績を誇る廃液削減装置XR-2000/5000、検版装置XPC-940（仮称）、次世代ハイブリッドワークフローXMFシリーズ、カラーブルーPRIMOJET、3Dデジタルカメラなども出展した。コダックはEcologyとEconomyを両立するサーマルCTPソリューションとスクリーン印刷などに最適なサーマルフィルム製版システムTrendsetter NXとDITR4401フィルムを紹介。日本アグファは、ハイエンドデジタルワークフロー：APOGEE Prepress7、現像レスサーマルプレート、高精細XMスクリーニング、ワイドフォーマット多機能UVインクジェットシステムを実演した。三菱製紙はサーマルデジプレートと面付ソフトの最新版を紹介した。

⑤最新フォント、カラーマネージメント、ディスプレイ

電子書籍、デジタル印刷時代を迎え各ベンダーから最新製品やソリューションの出展が増加した。モリサワは、最新フォントと年間ライセンスサービス、データ変換ソフト、イワタは信濃毎日新聞社で採用されたUDフォ

ントと電子出版への活用、InDesign新聞制作用プラグインソフトを紹介した。GMGジャパンとCGSジャパンは、各種印刷用のカラーマネージメント、プルーフ、インク削減ソフトを実演。ナナオは最新のカラーマネージメント対応液晶モニタの展示と紙だけではなく新デバイスのiPad/iPhoneとのカラーマッチングも提案した。

⑥後加工機、検査装置の出展拡大

デジタル印刷機の進展に対応して製本機、綴じ機、挿入機と検査装置が実演され注目を集めた。ホリゾン東テクノは製本管理システム、自動無線綴じ製本機、紙折り機、断裁機とブック・フォトアルバム向け多品種小ロット製本機を実演。ピツニーボウズジャパンは納税通知書インサータと検査装置、アフェクトロジックは画像検査システムによるバーコード、QRコードの検査、グロリーはバリアブル印刷向け検査装置を実演した。

おわりに

PAGE展は、1988年にわが国DTPの幕開けとともに第1回が開催され、その後、印刷業界のデジタル化、CTP化、オープンワークフロー・工程統合化、クロスメディア展開、プリントオンデマンドを牽引した。またITは、90年代PC化、2010年代インターネット化を経て2010年からスマートフォン、タブレット端末などの普及加速化による本格的なメディア多様化がはじまった。印刷メディアもこれらの環境変化やメディア融合が進展する中で、従来の情報を伝えるだけではなく、顧客ニーズや消費者、生活者のライフスタイルにマッチした情報のデザインとコミュニケーションが必要となってきた。まさしくPAGE2011のメインテーマ「情報デザイン新時代」が到来したことにより本稿で紹介した新製品、新ソリューションの活用とさらなる進化を期待したい。最後に、取材にご協力頂いた日本印刷技術協会および出展社の関係各位に誌上を借りて謝辞を申し上げたい。

楽事万歳

新聞に光を当ててみよう

愛媛新聞社 技術局長

両門 義幸



いつから始まったのか、先輩方に聞いても定かではないが、毎年、新年号の交換紙を続けている。交換各社の紙面状況などのほか、新聞制作システムや輪転機メーカー、また、交換紙の紙面評価も勝手に行ってきた。

いつから始まったのか、先輩方に聞いても定かではないが、毎年、新年号の交換紙を続けている。交換各社の紙面状況などのほか、新聞制作システムや輪転機メーカー、また、交換紙の紙面評価も勝手に行ってきた。

弊社の場合、1988年までは元日号が80頁、その後2004年まで100頁が続いたが、経済状況には勝てず、翌年から96頁2010年から88頁と減頁を余儀なくされてきた。但し、編集面が減ったというのではなく、広告集稿の厳しさからというのが本音。また最近、以前のような大胆な紙面レイアウトが影を潜め、通常紙面のような新年号が増えてきた感がある。挑戦しようという気持ちが失われつつあるのだろうか。IT全盛時代となり、以前のように各自が必死に考え、努力してきた「作業形態」がなくなったのだろうか。

ひと昔前のフィルム作業を思い出してみるとカラー写真の場合、マグナスキャン(4色分版機)を使い、モアレ(縞模様)の出にくい網点角度で2値フィルム化する。写真通りの分解が出来ているかを確認するため、カラーアートフィルムに焼き付け、色校正をする。OKなら4枚の透明ベースに貼り、遮光用の赤ベースを切り抜きマスク作成、プリンターで露光。4版を順次「自動現像機」に通し新聞大に合成する、という一連の流れだ。急いでも20分近くを要していた。その上、印刷センターまで3km位あるため、輸送時間を考えると迫り来る「降版時間」との戦いは尋常ではなか

った。また整理部では当該紙面のカラー配置場所を空白で出力し、印刷版作成時に合成していた。しかし、当時の方が紙面レイアウトは間違いなく凝っていた。整理担当者も組み物に角度をつけるなど、難解な組み方が日常茶飯事、学生時代に苦手としていた三角関数の早見表を作り対応していたことを思い出す。今思えば、我々は凄い努力をしていたのだなと感心する。

あれだけの労力を要していたものが、今では瞬時に出来上がる。PC画面上での紙面作業が誰でも同じレベルで出来るようになった。

さらに、カラー紙面はNSAC基準が確立し、新聞社間の差が少なくなった。これだけ紙面品質が向上したにもかかわらず、部数が増えない。広告も下げ止まらない。どうしてか。答えが今は出ない。それならば、やるべきことは、読者と接し、新聞の良さを伝えることしか、今は頭に浮かばない。

* * *

今回、そんな訳で「新年号交換紙に光を当てる」ことを思いつき、新社屋1階ロビーの南側に展示した。ガラス張りのホールは、晴れた日には太陽光が「燦燦」とふり注ぐ。保存しておきたい新聞を直射日光に当てるのは辛いことだが、それよりも社員や来場者に気軽に新聞の良さを感じてもらうことを最優先とした。期間は1月11日から25日迄。「読者の写真展」も同時開催で、予想以上に盛況だった。私も時間が許す限り、展示場所で見学者に説明したが「新聞の見方を教えてもらい今日来て得した」の言葉は本当に嬉しかった。終りに、弊社の1月14日本紙に掲載された、記事の一部を付記しておこう。

…計49社の新年号を展示。元日号は一部44～120頁に及ぶ力作が並ぶ。地域課題を取り上げた年間企画や調査報道、ご当地の豊かな自然や文化、産業を扱った特集などが満載され、多種多様な各地の様子が楽しめる。見学

者から「全国の新聞が1カ所で読めるなんてすごい」と感心深げ。昨年口蹄(こうてい)疫に泣かされた宮崎出身の男性は、全国の宮崎牛の健在ぶりを報じるふるさと紙面を熱心に眺めていた。

趣味

ボッシュ・レックスロス(株)
サーボシステム事業部
サーボシステム事業部長

江井 智之

百年に一度とも言われた2009年の不景気は当然ながら私の生活習慣にも大きく影響を与えました。良いのか？悪いのか？学生時代をバブル経済の中で過ごした私の趣味は、これまでにゴルフや海外旅行、冬にはスキーに夏にはキャンプ・ドライブとお金がないとできない事が多く、今の地味な趣味を思うと不思議な感覚を覚えます。もともとスポーツが好きでしたので、テニスやバレーボールなど仲間と楽しくプレイするのが一番でしたが、今は、なんとマラソンが趣味になっています。時間に余裕がある時は毎日でも近くのジムに通い、少ない時でも10Kmは走ります。勿論、速度はマイペースで走る為、時間は掛かりますが、走っている間の1時間あまり、いろいろな事を考えながら走ると時間を忘れ、疲れを忘れ、また一日受けたストレス解消にもなり、そしてなんとと言っても体重も減らせます。減量など食事制限なくして体重を減らすだけでなく、体脂肪も減り(皮下脂肪はどうも減りませんが?)、多少の筋力もアップ出来るのです。

もともとは、2009年の不景気の頃、世の中では嫌なニュースが頻繁に発生しており、派遣切り、電車での飛び込み、仕事上のトラブルなど、非常にストレスフルな毎日の中、如何に人生を楽しむか？如何に自身の精神を鍛えるか？を考えていた所、始めたのがジムでのマラソンでした。

始めた頃は体がきつく、つらい時間でしたが、徐々に体が慣れてきて、今や楽しくマラソンができるようになりました。学生時代には到底考えられない距離を走っています。何事もやれば出来るものです。

* * *

そういえば、何事もやれば出来ると思うもう一つに、3年前から始めたピアノがあります。勿論当時、楽譜は読めませんし、ピアノ教室に行った訳ではありません。

ピアノを弾くことに興味はありましたが、小さい頃から習わない限り出来ない事と諦めておりました。しかし、丁度、韓国ドラマが流行った頃、主人公の男性がピアノを弾くのを見て、“自分も弾けたらなー”と思い、ピアノを見に行った時です、鍵盤の光る電子ピアノを発見しトライしてみました。始めは光る位置に両手を合わせて弾くだけでしたが、徐々にリズムが分かり始め、そして手の位置を記憶し始めた頃には、音楽になっていました。一つの曲が弾けるようになると、次々に練習したくなり、さらに、楽譜にも興味を沸くようになり、少しずつ楽譜も理解できるようになりました。今では友達や家族には自慢できる程、上手くなったと思っています。これもまたチャレンジすれば出来ると思う一つになりました。

最近は少しずつ景気も回復してきていると噂がありますが、まだまだ、不透明な日本経済です。一方、アジア諸国の経済成長(特に中国)は著しく、GDPは中国に追い抜かれ、日本はどんどん置いて行かれています。少しでも日本の将来が明るいものになるように、新しいチャレンジを忘れず、日々の努力をしていきたいと思うこの頃です。趣味は勿論、人生を楽しむ方法の一つですが、また人間自身も豊かにし、そして精神も鍛えてくれる！趣味とはそんなものでもあるのかと思います。

「電波・通信技術で社会に貢献します」

世界の街秋葉原に本社を置く創業60年の電気技術商社です。

新聞社、通信社様をはじめ放送、マスコミ、映像事業、官庁、無線、セキュリティシステム関連その他の電気通信設備の設計・施工を行い幅広い分野でお客様第一主義に基づき社会に貢献しています。

- システム開発やミドルウェア・パッケージソフトのユーザ環境設定、パソコン・ネットワーク機器などの設置設定・保守・管理
- 放送局内放送設備機器設置工事。一度配置して稼働を始めると配置変更などが容易ではない設計段階でのレイアウト、耐震処理等
- 国土災害情報に対処するためのサポートからテレビ中継局の電波監視・点検保守

- 映像システムや監視システムの設計・施工
- 水門、河川セキュリティカメラシステムの設置・保守業務。洪水や高潮に備え24時間河川の水位の監視行っている水門のITVカメラの施工設置工事・保守点検業務
- 業務用無線機から官公庁防災無線システムをはじめ、タクシー、バス、運送会社様等多数導入。MCA無線システムの導入で震災などにより緊急事態が発生した際、各事業所と一斉に安定した通信の確保
- 個人・法人への固定・携帯電話の販売(ドコモショップ・auショップ)

これからも新聞社、業界各社のあらゆるご要望に対して「NOとは言わない」お客様第一主義のサービスを心掛けてまいりますので、新聞社、業界関連の皆様のご指導のほど宜しくお願いいたします。

田中電気(株)

未来社会を見据えた製品開発…

東京インキ(株)は、紙を媒体としたインキ事業部門、プラスチックを媒体とした化成品・加工品事業部門の3つの事業部門から成り立っています。

新聞印刷に係わるオフセットインキ事業では、印刷インキは基より紙を媒体とした消耗剤等のシステム販売、及び印刷機械、印刷周辺機器、デジタル印刷機器、関連資材の販売を行っております。またグラビア事業では、地球環境を見据えて、より環境に配慮した製品開発に向けて高品位印刷物に対応する製品の販売を行っております。化成品事業部門では、マスターバッチ事業のコア事業を柱に導電性コンパウンド、接着剤用パウダーレジンの機能製品事業を推進して、今後益々多様化してゆくニーズに的確に対応する為に、当

社の分散技術・加工技術を生かした各種製品を提供すべく日々取り組んでいます。また加工品事業部門では、長年に渡って培ってきた当社コア技術の分散技術を駆使して開発、生産された樹脂加工品を工業材料、包装材料、農業材料及び土木材料事業へ提供しております。

これら各事業を支える幹となる技術体制は、分散ケミカルの技術をバックボーンに幅広いフィールドでの技術に精通した企業体制でお客様のよきコンサルタントとして努めおります。当社のモットーは、技術開発・製造・販売・物流・品質管理の各部門が一体となって仕事を進めながら、人類が受け継いできた多くの財産を時代の要請に従いカラリングして製品化して行くことです。東京インキは、ケミカル技術を通じて明るく楽しい世紀づくりをコーディネートしていきます。

東京インキ(株)

技術と品質で社会に貢献

弊社は1945年の創業以来、受配電設備、変圧器、光通信機器、センサ、制御システム製品(受託開発製品、OEM製品)等、産業用電機制御総合メーカーとして「技術と品質で社会に貢献する」をモットーに、今日までその歩みを進めて参りました。

新聞業界との始まりは、1972年頃に開発した新聞発送用宛名紙印刷機制御装置にまで遡ります。

以来、約40年の間、新聞製作に関わる技術革新と共に、その多様なニーズにお応えし、インキプリセットシステム、部数管理システム、宛名印刷システム(オンライン/オフライン)、個数管理システムなど、様々な製品を全国の数多くの新聞社にご提供して参りました。

さらには、商用印刷業界においても同様の歴史があり、今日までに枚葉印刷機、フォーム印刷機、オンデマンドデジタル印刷機などの制御に関わる様々なハードウェア、ソフトウェアをご提供するなど、印刷業界において幅広い実績とノウハウを、蓄積して参りました。

近年では、新聞配送車両のトレーサビリティや、UV-LED点灯システム、新聞印刷受託(委託)支援システムなど、新たな製品開発にも積極的に取り組んでおります。

東洋電機は、これからも新聞業界の発展に貢献出来るよう、技術と品質により一層の磨きをかけて参りますので、変わらぬご愛顧を賜りますようお願い申し上げます。

東洋電機(株)

「スパイラル・アップ」

私たちは、良い商品やサービスを提供しお客様に満足していただくことにより、社員のやりがい生まれ、更に良いサービスをお客様にご提供できると考え、それを「スパイラル・アップ」という言葉で表現し、ビジネスコンセプトとしております。

これまでお客様の立場になって考え取り組む「お客様大事」の姿勢と、「人のやらないことをやる」というチャレンジ精神から多くの提案・開発を行ってまいりました。

お客様から「画像に強いNSG」という評価をいただいております。それに加えて10年前からは広告システムにも注力しております。他にもディスプレイプルフ、多メディア配信、選挙システムなど新しい発想のシステムをご提供し、さらに今春からは、広告の

PDF入稿に備え弊社のパッケージ「PS-GATEWAY」、「PDFチェッカー」の新バージョンの販売を開始するなど、業界の流れにいち早く対応しております。

私たちはこれらの製品に満足することなく、現場視点でより良いサービスの提供に取り組んでまいります。

最後になりましたが、弊社は2011年4月に株式会社インテック(本社・富山市)と合併いたします。

合併後もこれまでお客様に提供してまいりましたサービス内容に影響はなく、更に満足いただけるサービスの提供ができると考えております。

昨日よりも進歩した私たちであり続け、お客様と共にスパイラル・アップできるように努めてまいりますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。

日本システム技術(株)

第29回新聞製作人 新年合同名刺交換会開く

日本新聞製作技術懇話会は、日本新聞協会と共催で新年恒例の第29回新聞製作人名刺交換会を、1月7日内幸町の日本記者クラブ大ホールで開いた。全国の新聞社・印刷子会社48社の幹部ら78人と懇話会会員社41社の208人などのほか、協会、懇話会の事務局を含め、例年に劣らぬ計296人の出席者で会場は込み合い、新聞業界の景況回復を祈る気持ちの強さを裏付けた。午後3時半、新聞協会の富田恵編集制作部長の司会で始まり、まず清水忠協会技術委員長(毎日新聞社執行役員制作・技術担当)が挨拶。「昨年は色々な新しい動きがあった。日経の電子版発刊、共同通信の製作システム共有化への始動、受託・委託印刷の本格化などだ。今年もまた様々な新しいことが起こるだろう。新聞界には明るい話題もある。新学習指導要領で4月から小学校での新聞を活用しての授業が全面实施されるので、明るい材料として期待をしたい。プロレスラーのアントニオ猪木さんは、『元気ですか!』という積極的な挨拶をいつもやっている。元気があればなんでもできる。今年1年この言葉を胸に頑張っていこう」と会場に呼び掛けた。

次いで挨拶に立った芝則之懇話会会長は、リーマンショックから3年、株上昇、円高一服で始まった今年はどういう年になるのかと前置きして次のように述べた。

「新聞協会統計では新聞の総発行部数が昨年23年ぶりに500万部を割った。朝刊は0.4%の減少だが、広告の落ち込みが15%減と心配だ。しかし今年は多少プラス方向が期待できるようだ。そんな中だが、懇話会には三大イベントがあり、頑張っていきたい。一つはこの名刺交換会。10月にはウイーンでのIFRAエキスポ視察ツアーがある。三つ目の

JANPSは、諸般の事情で来年11月になったが、練りに練った結果を披露したく新聞社の皆様のご助言・ご支援をお願いしたい。

百年前にドイツのある編集長が予言した。新しいニュース媒体が出てきても従来の媒体と共存できるというものだ。新聞は生き残る」と力強く述べ、今後も新聞技術の開発・改善に全力を挙げると結んだ。

この後、弘中喜通協会技術委副委員長(読売新聞東京本社専務制作局長)が乾杯の音頭をとり、約2時間にわたって歓談が続いた。



今年への意気込みを語る芝懇話会会長

CONPT 日誌

- 12月8日(水) JANPS 検討会(9名参加)
- 12月13日(月)第36回年末全体会議(於日本記者クラブ大会議室、出席者35社44名、来賓3名)、懇親会並びに酒井寛氏への感謝の集い(日本記者クラブ・宴会場、出席者65名、来賓3名)
- 24日(金)事務局仕事納め
- 1月5日(水)事務局仕事始め
- 7日(金)第29回新聞製作人新年合同名刺交換会(於日本プレスセンター10階ホール、290余名出席)
- 21日(金)広報委員会(出席7名)
- 2月1日(火)評議員会(出席9名)
- 10日(木)クラブ委員会(出席8名)
- 15日(火)企画委員会(出席8名)
- 15日(火) JANPS 検討会(出席5名)
- 17日(木)広報委員会(出席5名)